

## 監事就任挨拶

この度監事に就任いたしました水島一誠です。

1974年関西学院大学卒業。在学中は北海道101(夕張)長崎(第一次)学年会(フォトフェスティバル)野尻湖合宿などに参画してきました。一年生の冬に何も分からず、北海道101というのがあるから行ってこいと先輩から言われ、雪の夕張に降り立ったのが全日とのかかわりの始めでしょうか。折しも日本赤軍の逃走中の只中で、夕張滞在中はずっと警察の監視を受けていました。(夕張到着時に宿泊先がなく、駐在さんの家に泊めていただいたのですが、夕張を離れる際の挨拶時に知らされました。)

卒業後は関学同期と「匹夫展」を毎年開催、50歳を期に中断。それ以降写真から離れ、暗室は家族の物置となっています。現在は、鍼灸師として毎日、線香ともぐさの煙に燻されています。微力ではありますが、監事としてお役に立てれば嬉しく思います。よろしく願いいたします。

## 写真展 阿波根昌鴻 写真と抵抗、そして人々

2024年2月23日から5月6日まで原爆の凶丸木美術館に於いて「阿波根昌鴻 写真と抵抗、そして人々」の写真展が開かれます。私たちは故大西忠保(明治大)、張ヶ谷弘司(獨協大)らの人々がかかわり「人間の住んでいる島」「あはごん主義」「天国へのパスポート」などの写真集が出版されていることを知っています。また、当時伊江島には二眼レフのカメラが一台しかなく、闘いのための証拠や資料のためだけでなく、島の人々のあらゆる生活にレンズを向けていたと聞いていました。その写真展が開かれると聞いてその写真展の主旨と内容・いきさつなどを伺いました。そして以下の返事をいただきました。

### 一、主旨と内容、展開の状況

展覧会名:「阿波根昌鴻 写真と抵抗、そして人々」

キュレーター:小原真史(東京工芸大学)

展示数:300点以上(予定)

阿波根昌鴻の遺したネガ約2600点から未発表のものを含めた300点以上を本土で初めて展示します。土地闘争の写真に加え、これまで知られていなかった伊江島の人々の

暮らしを捉えたスナップショットやポートレイトを多数展示し、阿波根の仕事に新たな光を当てます。

高精細なデータからデジタルプリントを制作・展示します。

ネガ自体は1955年以降撮影されたものが3000点以上あるはずですが、まだ全部はデジタル化しきれていません。

### 二、この写真展に至るいきさつ。

わびあいの里の理事長は謝花悦子さんになります。東京工芸大学の小原真史研究室が阿波根の遺したネガを高精細でデジタル保存を行い、阿波根昌鴻資料調査会の協力を得て展覧会が実現しました。それ以前に沖縄で阿波根昌鴻写真展実行委員会が立ち上がり、佐喜真美術館や伊江島などで展示を行っており、その流れで本土での展示が形を変えてスタートしました。

このご返事を頂くのに、張ヶ谷弘司さん、国立歴史民俗博物館の高科真紀さん、わびあいの里の喜納政次さん、原爆の凶丸木美術館の岡村幸宣さん、東京工芸大学の小原真史さんらの好意のご教授をいただきました。感謝感謝です。(東闊)

## 写真展・イベント情報

### ◎名古屋市立美術館

2024年2月24日

演題 「集団撮影行動とは何か・学生写真運動資料解題」

作品(資料) 全日本学生写真連盟関係資料(1966-1972)

講師 竹葉丈 1960年代後半、「政治の季節」に展開した学生写真運動の表現とその内容について紹介、検証します。

2023年12月19日～2024年3月10日

郷土の美術館:抵抗と模索—学生写真運動の展開

名古屋市美術館 常設展示室2

### ◎「生誕120年 安井仲治」展

2023年12月16日～2024年2月12日に兵庫県立美術

2024年2月23日～4月14日に東京ステーションギャラリー

#### 1. 安井仲治、20年ぶりの大個展

安井仲治の魅力は、多種多様な表現スタイルと技法にあります。「芸術写真」からドキュメンタリー、スナップショット、新即物主義、シュルレアリスムと、多くの表現動向を吸収しながら自分自身の表現を打ち立てました。

その作品は今なお新鮮で、ものを見る喜びと、見た



ものを写真で表現する驚きに満ちています。

2. ヴィンテージプリント、モダンプリント、約 200 点を一堂に展示

本展の見どころの一つが、安井自身がプリントしたヴィンテージプリント約 140 点です。彼の作品は 1945 年の空襲で焼失してしまったものも多く、残されたヴィンテージプリントは大変に貴重です。また、安井の活動を初期から晩年まで通して描き出すために、モダンプリントも約 60 点展示します。展示に向けて一点一点、研究を重ねて作成されたモダンプリントも必見です

3. 解き明かされる制作のプロセス

本展では安井が残したネガのほか、そのコンタクトプリントを参照し、彼がどのように事物を撮影し作品を作り上げたかを、調査しました。合わせて当時の撮影会の様子もご紹介します。

安井の生きた眼差しと足取りを感じ取っていただけることでしょう。

(愛知県立美術館ホームページ 紹介文から抜粋)

◎第 8 回 写真の散歩道 2023.10-2024.2

西垣勇夫さん「夢の暴力」(喫茶七番 12/11 ~ 12/24)

松本吉生さん「My Landscape V 続 影の風景」

(喫茶七番 2023/12/25 ~ 2024/1/21)

北条正明さん「昭和の女たち」

(喫茶七番 2024/1/22 ~ 2/4)

長谷川友子さん「ミャンマーとわたし」

(gallery+cafe blanka2024/1/23 ~ 1/28)

松本吉生さん「My Landscape VI 影の街角」

(愛知芸術家文化センター地下二階 スペース X

2024/1/30 ~ 2/4)

### 森美術館のレポート

#### 森美術館レポート (六本木ヒルズ森タワー 53 階)

〈私たちのエコロジー：地球という惑星を生きるために〉

環境危機に現代アートはどう向き合うのか

4 章からなる構成のうちの第 2 章に「この地上にわれわれの国はない」(公害・写真集) からピックアップされた 11 枚の写真が展示されています。

壁一面に 1950 ~ 80 年代の年表が大写しされていて、公害列島とも言われた当時の環境破壊状況を高度成長期と重ね合わせて可視化することができ、その中に「公害」の 8 枚が組み込まれています。また 3 枚は年表とは別に、A2 程度に引き伸ばされ他の写真家の作品と並べて展示されていますが、やはりこの「公害」の 11 枚の写真は圧倒的な存在感を放っていました。また近くに「水俣病を告発する会—テント村ビデオ日記」(1972 年・中谷英子・2 分 4 8 秒) が音声付きで流されていました。患者さんと支援する若い人たちがチッソ本社前に座り込んでいる姿や会社内に入って抗議する声など、映像によって見返しができるもの、そのダイレクトに届けられるものの確かさを感じました。

全体として他の章のいわゆる現代アートというイメージネーションによる創造の中で、「公害」という現実と直に

向き合っ生み出された写真・映像表現とがどのように共振し合うのか、曖昧模糊とした状態のまま最終章まで見てきました。

実は奇しくもこの同時期に足尾でも写真展を開いています。人口 1,500 人に満たない過疎の町、衰退する観光施設の待合所での写真展です。2 つの写真展はそれぞれが 2023 年の現象、風景であり、極めてリアルな在り様です。このように、かつての全日の写真は“活躍”しています。

(福室・増田)



森美術館よりお便りをいただきました。

全日本写真連盟の写真は、お蔭様で好評を頂いております。

大型の年表だけでは伝わらない、メディアとしての写真の強さを改めて実感しました。

また、その地域に滞在して制作された手法から、被写体との親密な関係や、風景に対する眼差しにも説得力があり、その時代の空気が生き生きと伝わってくるようです。(徳山拓一)

'65 ~ '79 までの全日・491 のアーカイブ作りは着々と進んでいます。お手持ちのネガや資料の情報をお知らせください。

お問い合わせ等：277-0053 柏市酒井根 2-20-11 東 闊 hig811@gmail.com